

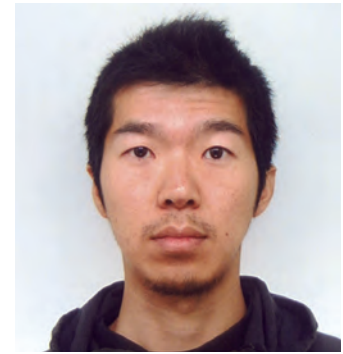
【ベストディスカッサー賞受賞者寄稿】

第 42 回日本基礎老化学会大会 学会見聞録

伊藤 孝

浜松医科大学 細胞分子解剖学講座

University of Washington, Department of Pathology



初夏が香る霧雨の仙台、仙台国際センターを初めて訪れる。新規完成の展示棟も合わせた現代性と機能性、風格を併せ持ち、心を踊らされた。日本老年学会として老年内科、歯科、介護と関連各分野を包含するスタイルは予期せぬ出会いによるブレイクスルーの契機となる稀有なプラットフォームを提供している。私は老化の基礎研究者として日本基礎老化学会の口頭発表会場中心に参加したが、公文さんの展示ブースで高齢者認知機能支援活動の展開を知ることができたし、また遠方の過去の共同研究者や既知の代謝内科の教授と偶然お会いしてお話できるなど、予期できなかった恩恵を大いに享受した。

二日間に渡る基礎老化学会の口頭発表は非常に興味深い演題ばかりで夢中になって聞き、心の赴くままに質問していたらベストディスカッサー賞を頂く栄誉と幸運を賜った。ポスター発表を関連学会と同時にすることは多様な分野の人材交流の仕掛けとして非常に優れていると感銘を受けた。企業のブースの方も同会場なので多くの気軽な交流が生まれたことと思う。金曜夜に開催された基礎老化学会も老化で志を共有する多くの先生方とディスカッションさせて頂いた。当日の私の発表に関しても沢山ご質問を頂き、学会のリフレクションの場としての懇親会の重要性を認識した。

さて、私が本稿の執筆を賜ったことは、学会の更なる発展の契機となるような少々厳しい視点を提供することが役割として求められていると推察する。自分自身は初参加で大変楽しく学会期間を過ごせたと断らせて頂いた上で、日本基礎老化学会大会に関して以下のような意見も述べさせていただきたい。

発表演題に関して、初参加の私は大変楽しんだ一方で、いつも同じような方々からお話を聞くという意見も懇親会で耳にした。これは組織委員の先生方の負担が特定の

機関の方々に重くなっていることや、学会員の方中心への演題依頼があったことにも起因するかもしれない。会の在り方に関しては緒論あり得ると存ずるが、より多様で若くて元気を注入してくれるような人材を巻き込み発展を目指すやり方も検討事項に値するのではないか。例えば海外留学中の老化研究若手を積極的に発掘し呼ぶこともあり得る。懇親会で韓国の先生がこれは日本人中心の学会とポロリと仰っていたが、大会の国際化も視点の一つと思う。類似かつ新参の抗加齢医学会との位置づけ、長期的な視野に基づく方向性の整理も必要に感じる。本会1週間後に抗加齢医学会年会が開催される中で、どちらにどう参加するか、老化研究者は現在どう決定しているのか知ることには方向性づくりの契機となると思う。なお両学会は医学系学会としてスーツが基本だが、海外のKeystoneやGordonのようにフォーマルな服装を禁止し、肩書を超えてサイエンスと人間を通じた交流を促すような場は老化に関して日本にはあるだろうか、もしくは必要だろうか。老化研究と社会実装への社会的要請は今後ますます強まり、熊本大学、理研、慶応大学のような老化研究の拠点が新規に立ち上がりつつある中、彼らをどう巻き込んでいくかも興味深い。本学会が老化の諸問題を解決し日本と世界を救うプラットフォームへと力強く発展することを祈念して末筆とさせて頂く。この度は貴重な機会を賜ったことを諸先生方に改めて厚く御礼申し上げます。

連絡先：伊藤 孝

〒431-3192 静岡県浜松市東区半田山一丁目20番1号

TEL：053-435-2086

FAX：053-435-2468

MAIL：itotakakun77777@gmail.com